

書齋の南向きの窓から、冬の陽ざしが深々と座敷の奥へ入ってくる。冬は年の余りだなどという言葉もあるが、ささやかな庭の木々が静かに長い影を土に描いているのを見ると、木の骨格もなかなかおもしろい。

ひ弱いものはみな群生して、組んでひとつの形をなしているし、逞しいものは孤高の姿をとって天をさすかのような態をなしている。落葉し尽くしてしまうと、もうその存在が見失われてしまうような淋しいものがあるかと思うと、梅や樺のように気骨稜々たる雄姿が、花や葉がなくてもまた一種の鑑賞にたえるものを持つているのもある。南窓の陽ざしを浴びて、じっと眼を凝してこれらの冬木々を眺めていると、この木々もまた、なんとなく人間に似たものを持つているような気がしてくる。

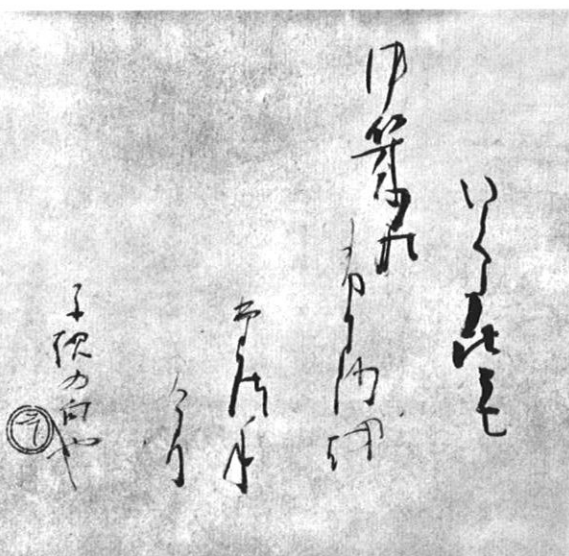
いろいろな肩書きや、華やかな彩りのあるものを身にとえば人の注目をひくが、本質的な充実したものがない者。一見華やかな面はなくとも、常に何か凛として見るべき態度を持っている者。群集すれば何かやるけれど、ひとりひとりでは存在の意義もない者。華やかな割りに何の成果をもあげ得ない者。いつともなく地味ではあるが、豊かな実を結んでいるような者。

それぞれの個性のままに、大地の上に根をおろして春秋を繰り返しつつ、年輪を重ねて巨大な位置をしめたり、じきに生長がとまつて立ち枯れゆくようなものもあるのを見ると、古い詩人や哲学者の言葉にも、草木の開落に人間の運命や性格を擬し、深い感慨を述べているものなどかなりあったことが、しみじみ思い出されるのでもある。

一日に何回か庭に出て、掃除のついでなどに、ふと枯れ切っているかのように見える木の枝が、思いのほかに艶があり、また細やかな膨らみを無数に着けているのを見出し、オヤオヤこの枝はもうすっかり春を仕度しているんだな、と気づくことも屢々である。

毎年のことなのであるが、冬木が枯れ葉を落とす時に、葉柄のつけ根に気づかぬような小さい、明年の芽を用意し、あるいは花を用意して、地球の公転が都合のよい光と温かみとを与えてくれる時節をひっそりと待っているのである。

省みて、自分のしていることを検討してみると、目前、刹那のことに眼を奪われて、移り変わってゆく境遇に対処する心配りなど、どれほどのものが自信のある個性に立って把握されているのか心もとなくなることも屢々である。



『幾度も雪のふかさをたつねけり』(子規) 昭和56年

〈「硯友」、昭和四十四年〉